

詠風集

十二月号



花鳥諷詠

12月号 (453号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和7年12月 ■ 第453号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	井上 泰至 2
	荒川ともゑ 4

第三十六回全国俳句大会	7
-------------------	---

赤星水竹居と陸治	山下しげ人14
----------------	---------------

一頁の鑑賞	上迫 和海16
	武井 禎子17

この人の作品	諸星 千綾18
--------------	---------------

虚子研究 『六百五十句』 研究 (70)	19
----------------------------	----

卯浪	27
----------	----

風報	29
----------	----

新刊紹介	30
------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

井上泰至選

特選五句

湖見えてコスモス見えて降りる駅

京都 大黒 ひさゑ

とは見えねども茶の花の盛りなる

福岡 山口 裕子

厨口玻璃に迷子のいなごかな

倉敷 芳賀 一世

翅の先少し尖りて秋の蝶

藤岡 飯塚 柚花

炉開をお稽古事の始とし

神戸 田中 あかね

二句短評

一句目——秋を探す旅。「て」のくり返し、単調な説明にならず、作者の旅心を的確に言い表している。駅にはさわやかな風もありそう。

二句目——茶の花の盛りなどあるのかもと思うが……という感じが、この句またがりのリズムで出ている。何度もたしかめたりして、やっぱり盛りだね、という感じが。

入選六十句

真つ白な花火終戦八十年

半田 稲葉 京閑

まだふつと母の気配も草の市

鳥取 石尾 正子

昼の月呑み込んでゆく雲の峰

北海道 安田 豆作

海よりも軽き湖風夕端居

神戸 涌羅 由美

一山の麓は浄土大花野

泉大津 多田羅紀子

百日紅しづかに燃えてをりにけり

大分 峯戸松祥子

蛸の他は聞えず城の径

松江 森木 八潮

振り返るたびに消えゆく大文字

東京 荒井 桂子

帯小さく結び浴衣の夕散歩

東京 庄嶋 里子

ふるさとの日暮の色の金魚池

白岡 小林カヨ子

赤のまま思ひ出遠くなるばかり

鹿児島 所崎 玲子

産土の空の広さに湧く蜻蛉

宇部 永田 芳子

太陽に倦みて病葉地に還る

福岡 大石 靖子

食ほそき夫へ手しほの心太

石川 宮下 末子

こんなにもちちはは恋し盆の月

札幌 齊藤 和加

点滴の窓を掠めし帰燕かな 神戸 島崎すずらん
 乾びゆく葉音へ蓮の実の飛べる 高知 坂本喜代子
 子規の朝顔空の色水の色 熊本 宗像 和子
 端溪の手に乗る硯洗ひけり 福山 小林 翠子
 一病の肩に重たき残暑かな 鳥取 長安 節子
 分校へ通ふ近道赤のまま 海老名 杉森 和子
 またの世も添ひたし夫の墓洗ふ 高知 片岡 幸枝
 口上にまはしの謂れ宮相撲 松原 加藤 あや
 たまゆらの阿蘇の黄菅を恋うてきし 大牟田 山下 順子
 闇さらに濃く収めたる大花火 高知 河野 紅柳
 白萩の一枝づつに風立ちぬ 高松 岩瀬由美子
 すれ違ふだけの事でも秋暑し 白山 中川外代子
 すぐそこと思ひし秋の遠きこと 姫路 上原 康子
 稲刈つて土の匂ひの風となり 新見 黒杭 良雄
 朝顔の咲くや明星光るなか 熊本 力 幸子

納涼や村の古老の赤ら顔 平川 丹野 慶子
 ぢりぢりと音持つやうな暑さかな 札幌 高見 慧子
 雨の来て大根の種蒔きにけり 長岡 佐藤 文子
 色町の灯の映る川流灯会 高松 金澤 正恵
 沈黙の古墳群へと地虫鳴く 朝霞 鈴木 月惑
 流水の白く乾びし秋の浜 鹿児島 永井 紀子
 穏やかに終ふ母の世草の花 福岡 井上 京子
 棒のごと手を振る爺も盆踊 高知 中村 梅子
 ほつほつと色づく柿に歩も軽く 福岡 古野ふじの
 山里の夕暮早し蕎麦の花 春日 永利五十鈴
 口紅をせがむ幼の初浴衣 山形 秋山 廣子
 桃を剥く手にその重さいつくしみ 西尾 沢井 真弓
 地震ありし海より生れて鰯雲 野々市 辻 文江
 さゆらぎのまま夜を待つ月見草 東京 柿崎 典子
 パンダ舎は居りし日のまま昼の虫 神戸 影山 里風

● 荒川ともゑ 選

特選五句

揺れが揺れ呼び揺れつづくねこじやらし

高松 高橋

遥

露の世や大事にしたき句の縁

島原 荒木

アヤ子

はかまごと落ちし櫛の実はずみけり

羽生 塩田

章子

こぼれつつ咲きつつ萩の風にあり

長崎 田上

喜和

草の名を問ひくる子らと歩す花野

倉吉 足羽

敬子

二句短評

一句目——畳みかけるように連なる「揺れ」の文字、その揺れの要因である風を言わずに風を見せている。至る所にあるねこじやらしを愛着をもって見ている作者もまた見えるようだ。

二句目——浅からず深からず風雅の交わりである句の縁とは、心豊かに時を共有できる仲間がいるということである。句を学んでいる者の心情がうかがえる。

誰彼の息災を聞く墓参かな	泉大津	山田	佳音
亡き父の笑顔の浮かぶ今年米	四日市	栗原ひろ子	
寛解と聞きてうれしき今日の月	大牟田	森永	清子
頂上に供養塔あり鳥兜	吹田	河辺さち子	
星の夜の瞬く名残ありにけり	静岡	杉田	和子
塗り壁の如き残暑に囲まるる	静岡	堀内	智子
夕映の蜻蛉の空となりにけり	草津	竹内	恵子
案じゐし稲は元気に刈られをり	伊賀	永井二紗子	
なかなかに九月の空になりきらず	島原	池田みを子	
人影も見えし牛舎の秋灯	北海道	金谷	郁子
尾頭のちぎれさうなる鰯雲	札幌	増田	植歌
正面に音聞きてより水涼し	高松	肥塚	英子
日照り田に立ちて心底仰ぐ天	長野	井出	節子
折り合ひをつけるかなしみ星月夜	所沢	木村	佑
夫婦して夜学で取りし博士号	尼崎	ほりもとちか	

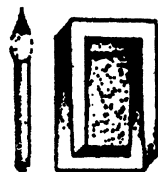
入選六十句

昼の月呑み込んでゆく雲の峰 北海道 安田 豆作
 海よりも軽き湖風夕端居 神戸 涌羅 由美
 遠花火二日続けて母の夢 始良 五反田加代
 百日紅しづかに燃えてをりにけり 大分 峯戸松祥子
 心持ちどこかがほつとする九月 つくば 大倉真知子
 スカートの触れて弾けて鳳仙花 金沢 田中 裕女
 秋草や葉先に光るひと雫 諫早 安原さえこ
 芭蕉葉に凭れ芭蕉葉破れけり 岡山 伴 明子
 白萩の咲いて風呼ぶ庭となり 加賀 正藤 宗郎
 帯小さく結び浴衣の夕散歩 東京 庄嶋 里子
 虫の声夜風となりて吹き寄する 福岡 服部 朝子
 母偲ぶ紙魚あまたなる仮名手本 安中 多胡恵美子
 鳴き足らぬ虫たちに夜の明け初めし 熊本 井芹真一郎
 端溪の手に乗る硯洗ひけり 福山 小林 翠子
 夜の帷降りし静寂やつづれさせ 高松 小林美智子

露踏んで今朝も健康畑廻る 能美 北 重子
 酔ひ少し入る名調子音頭取 八尾 窪田由紀子
 動線の起点終点冷蔵庫 糸島 小河美紗子
 口上にまはしの謂れ宮相撲 松原 加藤 あや
 白萩の一枝づつに風立ちぬ 高松 岩瀬由美子
 稲刈つて土の匂ひの風となり 新見 黒杭 良雄
 葉に隠れ地を這ひ回り咲きし葛 宝塚 細田 清子
 ぢりぢりと音持つやうな暑さかな 札幌 高見 慧子
 空磨く風に星増え夜半の秋 西宮 本郷 桂子
 草陰に千日紅の紅ひとつ 四国中央 豊田みゆき
 夜なべの灯漏るる母の背丸くなり 石川 白根 寿子
 下町の路地這ふ秋刀魚焼く煙 君津 鈴木 南子
 飛び石を灯す紙燭やちちろ鳴く 福岡 棚瀬 弥生
 夏料理眼下の海に獲れしもの 米子 遠藤 裕子
 手花火に集まる小さき膝頭 浜田 三沢 孝子

薄紅葉しばらく風を聴いてをり	鳥取 椋 則子
偲ぶ人皆そこにゐる星月夜	神戸 金田八江子
一献に枝豆限の無かりけり	芦屋 村田 明子
滝をみる吊橋美しくたわむ	前橋 吉川 えり
風鈴に呼ばるるやうに風の来し	太宰府 川路 泰子
蟪蛄のすでに疲れの錆の色	富山 高城 玲子
稲刈の中腰のまま振り返る	小諸 丸山 ま美
紫の小さき色より花野かな	宇佐 水野 公明
村ひとつ飲み込み香る葛の花	伊賀 前出 公子
虫の夜や隣家の車庫の閉まる音	十日町 小川 則子
星の夜の瞬く名残ありにけり	静岡 杉田 和子
秋の空雲の船団渡りけり	久留米 平岡 清志
無花果を届けて長居してをりぬ	東京 相沢 文子
振り向きもせぬ子にそつと置く夜食	太宰府 福永 惠美
露けしや葉末の雫野に消ゆる	福岡 有富 妙子

鉦太鼓粋だ鯔背だ祭髪	桑名 多胡 俊一
虫の音に闇の奥行広がり	東京 篠崎 千春
先に着き先にビールを飲んでをり	東京 青園 直美
直角に辻曲がりゆく蜻蛉かな	福岡 野口 明子
稲妻や黄金の穂波しろがねに	金沢 西野久仁夫
青田はや風の重たくなつてきし	島原 原 典子
ほつれ糸風に吹かれて秋簾	尾張旭 佐藤 武彦
解いて知る和裁の技や絹糸草	川西 大西 水芳
待つといふ心豊かな月の秋	八尾 藤井ケイ子
颯風や眠れぬ夜の握り飯	守山 菅 邦子
路地裏に風の道あり草の花	熊本 平山紀美子
幼子の四股踏む仕草宮相撲	川崎 飯川 三無
指先に触るる秋風追うてみる	諫早 外輪ふみえ
翔くるとき番となりし石叩	米子 中村 襄介
墓拝む身ほとりに来て夕とんぼ	綾瀬 鈴木智香子



編集後記

物捨てて捨てて終りし年用意

今井千鶴子

●今年は大切な方々の訃報が続いた。中でも掲句の作者は、虚子の秘蔵つ子として若き日から俳句の世界の中心にいた。私も氏の晩年、しばらくその句座に入らせて頂き、多くを学ばせて頂いた。明るい方だった。しかし、掲句のような「捨てて」のリフレインに作者の陰翳を感じざるを得ない。未練の心を捨ててこそ、前を向けるのである。

●九月の全国大会のレポートを載せました。様々な行事が重なる時期に、多くのご参加を頂いて盛況だったことに

心からの感謝の気持ちとともに、ある種の手応えを感じております。その成果をご確認ください。来年の鎌倉での大会もこの流れを引きついでいきたいと考えております。奇しくも十月八日、鎌倉高德院には、虚子の代表句の句碑が建ちました。そのお知らせとともに、虚子一門の遺産に改めて思いを馳せる機会に来年はしたいものです。

●長きにわたった『六百五十句』研究もめでたくフィナーレを迎えました。「花鳥諷詠」は創刊号から『五百句』以下の虚子句集の読みを、座談会形式で行い、虚子研究の柱としてきました。その意味でも大きな区切りを迎えたことになります。残る『七百五十句』は虚子没後の編集にして、評価が高くな、虚子の身近でその言行を筆録した赤星水竹居の『虚子俳話録』を次号から読んで参ります。水竹居の故郷八代で研究を続けてこられた山下しげ人氏

に、まず導入の文章を書いて頂きました。本誌の新しい虚子研究の試みにもご期待ください。

●十月号に誤りがありました。三十頁後ろから七行目（参列の犬のおとなし南洲忌）の作者は「松尾千代子」様でした。記してお詫び申し上げます。

（井上泰至）

花鳥諷詠十二月号（通巻第四五三号）

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年十二月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151

0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

電話

〇三三四五四五一九一

FAX

〇三三四五四五一九二

定休日

水・土・日・祝

郵便振替

口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム株式会社

〒112

0014 東京都文京区関口一丁目一九二